

【社会】 < 中学校 第2学年 >

1 結果のポイント

「地理的分野」については、地理的事象を統計資料等から読みとる力をみる問題、日本の気候の特色についての用語の理解をみる問題の正答率はいずれも80%を上回っている。他方、学習課題を考える力をみる問題、大陸からみた日本の位置を四方位を用いて理解しているかをみる問題、自然災害が起こりやすい原因を河川の特徴と結びつけて考える力をみる問題の正答率は70%を下回っており、身に付けた知識を活用して地理的事象を見いだしたり、いくつかの地理的事象を関連させて地域的特色を考える力十分身に付いているとはいえない。

「歴史的分野」については、わが国の歴史を世界の歴史を背景に、幕末から第一次世界大戦前後の社会までが出題されている。幕末の貿易の特色を二つのグラフから読みとる力をみる問題、明治政府の方針についての理解をみる問題や、その政策の内容と特色の理解をみる問題の正答率はいずれも70%を上回っている。他方、それ以降の自由民権運動、日清・日露戦争をめぐる外交政策、第一次世界大戦前後の国際情勢の学習内容をみる問題の正答率は、50～60%程度であり、歴史的なできごとを、地図などの資料を活用して理解したり、世界の歴史を背景として歴史の流れの中に位置付けて理解する力が十分身に付いているとはいえない。

2 結果の分析

2

2 次の文は、日本の気候の特色について簡潔に述べたものである。文章を読み、(1)～(4)の問いに答えなさい。

世界地図で見ると、日本は中緯度で大陸の(A)に位置し、島国であるため、独特な温帯の気候です。

夏と冬には、風向きが逆さになる季節風の影響を強く受ける地域です。特に梅雨や秋雨の時期には降水量が多く、夏から秋には西太平洋の熱帯海域で発生した(B)が接近し、各地に大きな被害をもたらすことがあります。冬には、日本海側を中心に雪が降り、世界でも有数の豪雪地帯となっています。

また、6月からはじまって10月まで夏が続く南西諸島は、亜熱帯とも呼ばれています。

(2) 文中の(B)にあてはまることばを、ア～エの中から一つ選び、その符号を書きなさい。

ア 津波 イ 台風 ウ 高潮 エ 高気圧

(4) 文中の下線部のように、日本では毎年のように大雨による洪水などの自然災害が起きています。そのおもな理由を、次の三つのことばをすべて使って、簡潔に説明しなさい。

【 短く 日本の河川 急 】

(1) 「知識・理解」の力をみる問題の例

<問題> 2の(2)

<結果> 正答率 87.5%

<分析>

この問題は、「熱帯海域で発生し、夏から秋にかけて日本に接近するのが台風であることを理解しているかどうか」を問う問題である。「台風」についての情報は、天気予報やニュースでも頻繁に伝えられており、世界を大観する中での日本の気候の特色をあらゆる知識としておおむね定着していると考えられる。この問題のように、用語などの知識を問う問題については、高い正答率を示し、学習の成果は着実に上がっていると考えられる。

(2) 「思考・判断」の力をみる問題の例

<問題> 2の(4)

<結果> 正答率 63.2%

<分析>

この問題は、「日本で大雨による洪水などの災害が起こりやすい原因を日本の河川の特徴と結びつけて考えることができるかどうか」を問う問題である。誤答としては、日本の河川の特徴の理解が十分でないもの、また、無回答が多いのが目立った。生徒が大雨による洪水などの災害が起こりやすい原因として考えられる複数の知識や具体的な事例を、うまくつなぎ合わせるができなかったことを示している。世界を大観する中での日本の気候や地形の特色から、災害が起こりやすい要因を考察し、考えを文章でまとめていく力を身に付けさせる指導の充実が求められる。

(3) 「資料活用の技能・表現」の力をみる問題の例

<問題> 4 の1

<太郎さんが記入した白地図>



1914年、オーストリアの皇太子夫妻が、セルビア人の青年に暗殺されました。オーストリアはセルビアに宣戦し、まもなく、ドイツ、オーストリア、トルコからなる同盟国側とロシア、フランス、イギリスからなる連合国側に分かれて、第一次世界大戦が始まりました。

日本は日英同盟を理由に連合国側に参戦し、1917年には、アメリカ合衆国も連合国側に加わりました。

1918年、ドイツが降伏し、翌年にパリで講和会議が開かれ、ベルサイユ条約が結ばれました。

1 太郎さんは、地図を開いて講和会議が開かれたパリの位置を調べて、右の白地図に記入しました。太郎さんが記入したパリの位置として正しいものを、略地図中のA～Dの中から一つ選び、符号を書きなさい。

<結果> 正答率 64.2%

<分析>

この問題は、「第一次世界大戦の講和会議が開かれた都市の位置を地図上に、示すことができるかどうか」を問う問題である。今回の学習状況調査では、グラフなどの統計資料から社会的事象を読み取ったりする問題については高い正答率を示したが、本問題では、都市の位置に関する正しい知識が身に付いていることが前提条件となっているため、正答率は下がった。このような資料活用の技能・表現の力の育成が課題となっていると考えられる。したがって、広い視野から社会的事象を総合的にとらえる学習を促す観点から、学習指導に当たっては歴史的分野、地理的分野の独自性を尊重しながらも分野間の有機的な関連を図るよう工夫することが大切である。

3. 分析を踏まえた指導方法の改善

(1) 指導計画の工夫改善

基礎的・基本的な内容が確実に身に付くよう、生徒の実態や地域性を踏まえて内容の重点化を図るなどして、どの内容についてもバランスよく適切な指導時間が配分されなければならない。そのためには、多くの知識を詰め込む学習指導の改善を一層進め、内容の厳選に努める必要がある。特に学習指導要領「歴史的分野」の内容「(5) 近現代の日本と世界」については、適切な指導時間を確保し、じっくり学習に取り組むことができるよう指導計画を修正、改善する必要がある。

(2) 指導方法の工夫改善

両分野ともに、様々な視点から地域的特色や歴史的事象を見いだしたり、考察したり、またそれらを自分なりに表現する力の育成を図る必要がある。そのためには、作業的・体験的な学習を積極的に取り入れたり、わかりやすい資料の提示等を工夫するなどして、生徒の学習意欲を高め、自ら課題を見だし、自ら学び考え、課題を解決する問題解決的な学習を一層充実させ、生徒の主体的な学習を促す中で、一人一人の学び方、社会的なものの方や考え方を、継続的、多面的に把握し、それらを育成する個に応じたきめ細かな指導の充実を図る必要がある。これについては、県の「学力向上プラン」における各事例を参考にし、各時間における評価規準の具体を活用できるよう努めたい。

(3) 学習環境の工夫、学習集団の育成

今回の調査では、「地理的分野」では、「大陸からみた日本の位置を、4方位を用いて理解しているかどうか」を問う問題、「歴史的分野」では、「歴史上のできごとを時代の流れに位置付けて理解しているかどうか」を問う問題についての正答率が低かった。社会科の学習においては、関係地図や関係年表はいつでも提示しておき、日常的に活用できたり、それらの見方や活用については、学習内容に応じて繰り返し指導ができるよう、学習環境にも工夫を加え、学び方を学ぶ学習の一層の充実を図る必要がある。

